

古事記に曰く、軽太子、軽太郎女に奸けぬ。

故にその太子を伊予の湯に流す。この時に、

衣通王、恋慕に堪へずして、追ひ往く時に、

歌ひて曰く

或本の歌に曰く

八九番

居明かして 君をば待たむ ぬばたまの 我が

黒髪に 霜は降るとも

九〇番

君が行き 日長くなりぬ やまたづの 迎へを行

かむ 待つには待たじ

天皇、鏡女王に賜ふ御歌一首

九一番

妹が家も 継ぎて見ましを 大和なる 大島の嶺

に 家もあらしを

鏡女王の和へ奉る御歌一首

九二番

秋山の 木の下隠り 行く水の 我こそ益さめ

思ほすよりは